
番外編～おめでとう 大好きな貴女に～

梨栖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

番外編〜おめでとう 大好きな貴女に〜

【Nコード】

N0261S

【作者名】

梨栖

【あらすじ】

3月30日。それは、貴女にとって、それに私達にとっても大切な日

くっあいてっ

おはよう、こんにちは、こんばんわ！梨栖^{りす}と申します！

3月30日は、玖月さん家の近藤操さんのお誕生日です。

12月10日、ウチの恋歌が操お姉様にお祝いして貰ったというのに

ここでお返しせねば男じゃない！（元々男じゃないんですが）と思います、

今回の話を投稿させて頂きました。モチロン許可は貰っておりません。

でもお返しなんて建前ですね^^久しぶりに真選組メインで書きたかったり、

操お姉様と彼女の恋人殿とイチヤイチヤしてるところが書いてみたかったり……

書いてる私もとても楽しかったです^^

今回はそんな素敵な機会を下させて頂いてありがとうございます！

最後に、操お姉様が大活躍！「唯一の女隊士」を盛大に宣伝して、私のご挨拶とさせて頂きます！

「唯一の女隊士」 <http://ncode.syosetu.com/n9978j/>

皆さんゼッタイお目通しくださいねっ！ 梨栖さんとのお約束で
すよっ(。・D・)ノ

くごあいさつ（後書き）

そしてよかったらこちらの方も。連載終わってるので

「オイ、さつさと更新しろよカス（。d）」

というストレスにさいなまれる心配は御座いません。

「銀魂」出動！真選組！！」 <http://ncode.syosetu.com/n2110j/>

「銀魂」集合！真選組！！」 <http://ncode.syosetu.com/n6438m/>

♪プレゼントは、貰う方も贈る方も嬉しい♪（前書き）

30日まで、三週間以上前の話。

プレゼント選びに四苦八苦する恋歌とあるお方のお話です^^

姉への誕生日プレゼントなんだから、人目を気にせずゆっくり選
びたい。

単純だが、新聞や雑誌、TVにまでちよくちよく顔を出している
恋歌には、至難の業なのだ。

これくらいの変装はしておかないと、必ずどこかで声をかけられ
る。

今の恋歌にとって、それはかなり鬱陶しいものであった。

ふと目に留まったのは簪。いいんじゃないかと思ったが、手は伸
ばさなかった。

考えてみれば、自分に簪をくれるくらい大量に持っている操には
あれ以上必要ないだろう。

デパートを右往左往、東奔西走し、プレゼント探しに暮れたが、手に提げるものは何もなかった。

これで何件目だろう。並ぶ小物を食うように睨んではうなり声を挙げるのは。

「んんんんん……ん……」

いつも通りにうなっていると、自分より低いうなり声と重なる。

「ん？」「」

そこには真つ黒な髪を左側で一つに束ねた長身の女性がいた。

メイクは紫系統で、着物もそれに合わせている、美人の部類。

バッチリ目が合わさり、逸らして他人事をするのも苦しい。どうしようか考えていると、その女性の口が動いた。

「初めまして、かつ……ツラ子だ」

不意な自己紹介に、恋歌も口をどもつかせながら話す。

「ああ、お、お初にお目にかかります。すど……」

言いかけて紡ぐ。ここで本当の名を名乗れば、こんな窮屈な変装をした意味が無いのだ。

「ス……ズガシカズコです」

「どこのシンガーソングライターの親族!？」

それから、ツラ子と名乗る女性も恋人の誕生日が近いそうだ。

奇遇だな、上司の姉も誕生日が近いんだというと思いのほか意気投合した。

話も進み、プレゼントから話題は遠くはなれ全く関係の無い話になってしまふ。

そして話が進むにつれ、相手を気遣う事無く、気になる質問をすることが出来るのだ。

「ヅラ子殿にプレゼントを貰う御仁は幸せですなあ。どんなお方で？」

その質問に、視線を落としたヅラ子。何を最初に言つのか迷っているらしい。

「……天女、かな。綺麗で愛らしい。故にずっと捕まえておかないと消えてしまうのではないかと怖くなる……」

スイッチを入れたかのように饒舌になったヅラ子。しかし最初の一言以降、恋歌の耳には入ってこなかった。

天女？ 恋歌は思わず自分の耳を疑った。天女のような男なのか、それとも本当に……

『人間が何億もいるように愛の形だって何通りもあるのよ。そつと見守ってあげればいいの』

巡回中、男同士で手を繋いで歩いているのを見て非難した時、姉に言われた言葉。

恋歌は何も聞かないことにした。それより、彼女の恋人の話について耳を傾ける。

「自分には勿体無いと思う時もある。年上の筈だが、それを思わせないくらいの幼さもある」

のろけ話が終わったのか、ヅラ子は少し弾ませた息を整えていた。

天女、年上、幼さ……恋歌の頭にはふと操の姿が浮かび上がる。

「……何か、姉さまによく似たお方じゃのう」

思ったと同時くらいに、口からこぼれ出た。ツラ子の小首が斜め45度に傾いた。

「姉さま？」

「先程申した上司の姉じゃ。他の者もだが私の事をまるで本当の妹のように思ってくれるのだが時折子供っぽいというか……」

表情くるくる変えて。悪戯好きで。意地悪なトコもあって。

あと大食いで。

でも、大好きで……。

最後の台詞が、ピッタリと重なって驚く。顔を見合わせてふわりと笑い合った。

「ますます、よく似ている」

「ホントに。まるで同一人物について話しているかのよう」

それから、恋歌とツラ子は、一緒にプレゼント探しをした。

恋歌とツラ子が、ハンドクリームとブレスレットを勝った頃には、
ほたるのひかりがデパートに流れていた。

「上司の姉に気に入って貰えるといいな」

「おう！ ツラ子殿の恋人にもヨロシクな！」

そう言って、デパートを後にする。

背を見せて帰るなど、普段の彼等の関係であればまずない事だ。

手が荒れると言っていた姉に、プレゼント用に包装した匂いつき

ハンドクリーム。

3月30日。

その日からまだ二週間以上も先なのに、
気が早すぎただろうか…
…

Happy Birthday 真選組篇 (前書き)

来たりますは30日。

皆さん操お姉様に誕生日プレゼントを渡そうと必死です^^

♪ Happy Birthday ♪ 真選組篇

「てくまくまやこん!! はっ……何じゃ、夢か」

枕もとの時計は、朝の5時を指していた。

目が覚めて、腹筋で飛び上がった恋歌が真っ先に確認したのはカレンダー！。

過ぎ去った日付には、バツがつけられている恋歌のカレンダーは3月のページを開けていた。

バツ印が29日で途絶え、30が真っ白だ。この日は……

縁側を抜き足差し足で歩く。九番隊の隊士が使っている部屋に到達した。

用があるのは、三ツ木の部屋のすぐ隣の部屋の主。

きれいに包装されたプレゼントを携え、そつとその部屋の襖を開けた。

10cmくらいあけた所で、寝ているかどうかを確認。

艶めかしい長い黒髪は、呼吸に合わせて波打つ。

「姉さまは……寝ておるな」

「コレはちょっとやさつとじゃ起きないでしょ」

「ああ……つて#\$%&%%\$#\$%&!?!」

湧いて出た声の主に返答しかけて、声にならない悲鳴をあげる恋歌。

落ち着いて横を見た。真っ先に視界に入ったのは、藍色の猫っ毛。

「……李麻？」

「甘いよ、ふくちょー。近藤操親衛隊隊長、この御月李麻を出し抜こうなんて」

聞いた事もないファンクラブの名前に、恋歌は開いた口が塞がらなかった。

恐らく今、即興で作ったのだろう。

操にプレゼントを渡すにあたって、ある程度の邪魔は覚悟していたが、相手が予想外だった。

操が京から帰ってきた時も、何度か一緒にした仕事でも、宴会で

も……

他の隊士とは違い、李麻は操に必要以上にくつつこうという素振りを見せなかったのだ。

故に、こいつだけは絶対にここには来ないと踏んでいた。しかしそれが災いしたようだ。

「あんなベツピンに、思春期真っ只中の僕が興味を示さないとでも思ったのかこのバカ女！」

小声で囁く李麻。その言葉を聞いて、ある予感がした。まさか、こいつ……

「そう、アレは連中を欺くための芝居。全てはこの日、一番最初にミサねーさんにプレゼントを渡すための布石だったのさ！」

「ふざけるな！ 姉貴分に一番最初にプレゼントを渡すのは妹分だと決まっておる！」

両者一步も退かず、にらみ合いが続いた。

「あーあー、にわかファンは引っ込んでくださいよ。俺の方が長いんですから」

何の前触れもなしに、二人の間に割って入ってくる山崎。

「「＃\$％&\$％＃&!?」」

「ザッザザ、ザキてめえ!! この裏切り者オ!!」

「知らねえよ! ずっと俺達騙してた奴に裏切り者呼ばわりされたくねえよ! この詐欺師!!」

「ぽつと出に地味が出しゃばるないわ! 二人まとめて時雨殿のトコ突き出すぞ!!」

その名前が出た瞬間だった。山崎と李麻の間に、北極で吹くような風が吹く。

まるでリモコンで操作したかのように、固まって動かなくなった二人。

勝った。確信して、10cm開いた襖に手をかけたその時だった。

ガッ！ ゴッ！ドゴッ！！

「イテテテ、んだよ新手か……！？」

突如降りかかった鉄拳制裁。見上げればそこには……

「お、おはようございます……副長」

「き、今日は早いねー土方さん」

「お前等のせいで目が覚めたんだろうが！ 姉さんの迷惑も考えろ」

はあい……と渋々返事をして、山崎と恋歌はある事を思い出した。

こないだの密偵の報告書……今日が締め切り……

思い起こした時にはもう遅い。引き続き土方の不機嫌そうな顔が二人に向けられた。

「そういえば密偵の報告書……今日締め切りだったよな？ もう出来てんだろ？」

「え、いや、その……」

山崎が答えない間に、ガツと首根っこを掴まれた山崎と恋歌。

「出来るまで見てやるから今日中に仕上げるんだなあ」

「ギャアアア!!」

「触るなアア!! 痴漢! 変態!!」

そのまま土方に引きずられた二人を、夜まで誰も見なかったという。

「おはよう、李麻君。……どうしたの?」

今の騒ぎで起きたのか、操がひよこつと顔を出した。

「嵐が去ったよ」

何となく、手に持ったプレゼントを渡す気にはなれなかった。

「みい姉、誕生日おめでとう！」

「「「「「おめでと〜ございまあぁあぁっす〜!」「「「「「

本来は、月に一度誕生会を開き、その月に生まれた人間を纏めて祝うというのが近藤のやり方であった。

三月生まれの者達の誕生会は、もう済ませてある。

にもかかわらず何故当日に、姉にあたる操の誕生日を祝うというのだ……

近藤の姉命な性格が生み出したに他ならない。しかし、それも詭弁だな。と恋歌は続ける。

仲間の誕生日だろうが、姉の誕生日だろうが……酒を飲めればそれで良いのだ。

現に、最初の一言以降、まともな声で喋っている隊士などいない。

操が自分の席で、困った顔をして座っているのを見た。

……チャンスは、今を置いて他にない。

ヅラ子が一押し、ラベンダーの香りつきのハンドクリームの紙袋に意識をやった。

「姉さまっ!」

後ろから、抱き付いて彼女を呼ぶ恋歌。サラサラの黒髪が頬をなでた。

操は、一、二度瞬きをしながら恋歌の腕に手を添える。

「もう、恋ちゃんまで酔っちゃったの?」

「いや未成年だから……ほい!コレ、プレゼントじゃ」

「私に？」

きよとした顔で、訊く操に恋歌は満面の笑みで頷く。

「朝は邪魔が入ったし……昼間は姉さまがおらんだから渡す機会が無かった故」

そう言って、懷から例の匂いつきハンドクリームを出した。

「ありがとう恋ちゃん！ 大切にするわ」

「『ありがとう』は、私の台詞じゃ」

生まれてすぐに亡くなった、顔も知らない母。あまり構ってくれなかった父。

兄弟も姉妹もいなかった恋歌に、十九年経って、神様から贈られた良き姉であり、良き母。

操がいるから、何時も自信を持って背中を押してくれるから頑張れる。

「だから、来年も再来年も、その先もずっとずっと……プレゼントさせて？」

「モチロン。それから、私の方こそお願いよ？」

二人が笑うと、まるでそこだけに花が咲いているかのようになる。

それを酔った目で誰かが見ていた。

「あーっ！ ふくちょーズリィ！！ ミサねーさんにプレゼントしてるううー！！」

それから、各々紙袋や小奇麗な箱を手にとって、我先にと駆け出しました。

一段落ついた頃には、操の周りはプレゼントに溢れていた。

しかし、誰の袋をあけても大体同じ。

白、黒、赤、青、桃色、水色、黄色……様々な簪が袋から現れた。

これなら操が、あんなに簪を持っている理由も頷ける。

そして、操がそれらを見ている背後で、真似しが！ という喧騒が繰り広げられる。

そんな中、操はふとある事に気が付いた。

「あら、トシ君と恋ちゃんがくれたやつ……紙袋が一緒だわ」

恋歌は思わず目を見張った。見てはいなかったが、土方も恐らくそうだろう。

同時に、嫌な予感がした。

「二人とも何が入ってるの？」

袋を開けながら楽しそうに。歌うような口調で訊く。

「姉さん

だから

姉さまが最近手が荒れるって言うておったから……」

そうして袋から顔を出したのは、二つのラベンダー色のハンドクリームだった。

「あらま」

「ラベンダーのハンドクリームを……」

その瞬間、簪の真似の有無で争っていた男達の喧騒がぱたりと止む。

彼等が作った、邪悪な雰囲気をも凌ぐオーラ……というより殺気が部屋を包んだ。

「ふ、副長……せ、せつかくの宴会ですし……ね？」

「須藤さん。操隊長が困った顔で……ホラ」

隊士達がなだめる声などに、全く耳を貸さない。

「悪ふざけも騙し騙しにするんだな……貴様、コッソリ見て真似しただろ!!」

「何で俺がお前の行動をコッソリ見なきゃならねんだよ。言いがかりも大概にしやがれ」

楽しい宴会場が、一瞬のうちに殺伐とした戦場になる瞬間だった。

「言いがかりじゃないぞ。私は三週間前くらいからコレを買った。店に裏取ってくるか？」

「俺は一ヶ月前から決めてたぞ。やっぱり真似したのお前の方だろ」

「そんな事言ったらなあ！ 私は十二月から決めてたんだぞ、やんのかおっさんコラア!!」

「上等だクソガキ!! 表出ろ、今日こそ決着つけたらあ!!」

睨み合いから掴み合い、ついには刀まで取り出して真剣勝負にまで出た。

トシイ！ 恋歌ア！ やめてえええ！

いつけー須藤！ 今日こそ土方の首とっちまえー

全くもう……誰が主役だと思ってるのよ。

この宴会場で操が初めて飲んだ酒の味。それは本人のみが知る事である。

♪ Happy Birthday ♪ 桂篇（前書き）

時間軸的に30日のお昼です。

前話で恋歌が言った「姉さま昼間はおらんだから」の昼間です。

そして今までより短いです。ごめんなさい。

♪ Happy Birthday ♪ 桂篇 ♪

「姉さまー!!」

仕事を抜け出し、白昼の江戸を駆ける恋歌。しかし、どれだけ騒
ごうと操が現れなかった。

江戸の広さに軽い絶望を抱き、空を仰ぐ。屋根の上は、暖かかつ
た。

そんな事を知る由もない操は、北の香取神社にいた。

街のはずれにあるせいかな人気もない。神社として機能していない場所である。

階段を登り切るなり、彼女はぱつと目を輝かせた。

そしてその目線、境内社の手前にある大木に男が一人よっかかっている。

操の到着に、ピンヒールの音に気づいたその男は、彼女を見てふわりと笑う。

男の黒い長髪が、風になびいた。

「操」

男はただ一言、彼女の名を呼んでそつと胸に抱き寄せる。

操は抵抗もせず、男の逞しい胸板に頭を預けて彼の名を呼ぶ。

「小太郎」

真選組九番隊隊長、近藤操と、攘夷浪士の一派の頭、桂小太郎。

本来は、こうして身を寄せる事はおろか、会話をする事も許されぬ二人。

きっかけ……と言われれば、思いつく言葉がない。

知らず知らずの内に募った気持ちが膨らみ、気が付けば収拾のつかないほど大きくなってしまった。

『愛したらいけないのに、許されないのに！ 貴方が恋しくて堪らないの！』

拭っても拭っても溢れる想いが、操をああ言わせたと桂は思う。

そして、それは自分もあいこだとも思う。でなければ、あの台詞は口から出て来なかっただろう。

『…俺もお前を愛していると云ったら、信じるか？』

それに関して後悔はしていない。する必要もないからだ。

背を向けて自分の足の間に座っている操の身体を包みながらそう思った。

そして、ふと懷に入れたハンカチとブレスレットの事を思い出した。

彼女に回した手を一旦離すと、操は不思議そうにこちらを向く。

そうして、ハンカチを差し出す。

「あら、私に？　ありがとう……」

と受け取る手に、ブレスレットを通す。細く白い腕に、それはいつも簡単に通ってしまった。

「バレンタインのお返しと……誕生日プレゼントだ。生まれてきたことに感謝する」

しばらく嬉しそうに、それを眺めていた操だが、ブレスレットを見て怪訝そうな顔を見せた。

桂は顔が曇るのを隠せなかった。不味い……気に入らなかったのか。

そんな桂をお構いなしに、操は口を開く。

「どうして私がコレが欲しいって分かったの？」

「ほへ？」

思いもよらぬ発言に、思わず間抜けな声を上げてしまった桂。

これはプレゼントを選ぶ折、スガシカズコと名乗る町娘に薦められたものだ。

操に良く似た彼女の上司の姉が、前にコレを見てため息をついていたと。

だからと言って操が欲しがっているとは限らないのは分かっている

だが、思わず買った代物である。

まさか、その上司の姉と好みが被っていたなんて……と桂は事のあらましを操に話した。

すると、一瞬操は思い当たる節があったかのような表情を浮かべる。

「心配するな、俺はお前以外の女になど興味はない」

「も、もちろん。私だって信じてるわ」

と繕い、腕に通った銀の飾りを見て、確信した。

これは、先月恋歌と買い物に行った折、欲しいと思ったブレスレットに違いない。

目的の妙のプレゼントを買うための予算以外に持って来なかったので諦めたのだ。

口に出した覚えはないが、確かにため息をついたような気はする。

あの娘は、着飾った自分に恥ずかしがりながらも見抜いてしまったのだろう。

「ねえ、その子どんな子だった？　可愛かった？」

「だからお前以外の女には……」

「そういうんじゃないの。純粹にその女の子が気になるだけよ」

この詰問に、あたふたしながら答えに相応しい言葉を頭の中で探す桂がひどく愛しく思えた。

操がそれを笑うと、それにむつとした桂が、そつと彼女に口付けをする。

そこから先は、言葉など必要なかった。

この世で一番愛しい貴女へ。

年に一度の誕生日、おめでとう。願わくば……ずっと……

F
i
n
,

♪ Happy Birthday ♪ 桂篇（後書き）

以上、Happy Birthday 操お姉様!!

そして、こんな素敵な女性を生んで下さった玖月さんに感謝!!

以上、梨栖でした!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0261s/>

番外編～おめでとう 大好きな貴女に～

2011年10月6日12時40分発行